外国語教育と文学教育

阿　部　征一郎

序

N. フライは*The Well-Tempered Critic* の中で文学批評の問題と文学教育の問題とは切り離しては論じられないことが分かったとして，英語（国語）教育における文学教育の問題について触れている[1]。彼は英語を落したと言って相談に来た学生の言葉を例として引く。

> "Y' know, I couldn' figure what happened, cause, jeez, well, I figured, y' know, I had that stuff cold — I mean, like I say, I'd gone over the stuff an' I figured I knew it, and — well, jeez, I do' know."
>
> （どうしてこんなことになったのかさっぱりわかんないんですよ。ぼくはよく勉強したのにどうしてだかわかんないです。ぼくは完全に暗記したと思ったんだ。何回もさらったんだけど。まったくめんくらっちゃうよ。）

フライはこの学生が試験に失敗したのは，自分の話を散文に書き換える難しさをよく理解していなかったためで，15年間の学業は彼の話し方に何の影響も及ぼさなかったとして，教育の問題を浮彫りにしている好例だと言う。確かに，この学生は英語教育によって，言語生活が豊かなものとなっていない。外国語教育においても同じような問題があるのではないだろうか。実は，外国語教育と文学教育とは切り離せない問題なのではないだろうか。

I

外国語教育[2]がどのような形であれ，個々の学生にプラスになっているとすれば，より効果的な教育とはどのようなものかという議論になるであろうが，果たしてその前提を単

---

1) Northrop Frye, *The Well-Tempered Critic*, (Bloomington : Indiana University Press, 1963), pp. 15-20. 引用の訳は渡辺美智子訳「よい批評家」（八潮出版社，1980）による。

2) 先に筆者は「英語教育試論」と題して，英語教育の改善について，いくつかの提案をした。(Artes Liberales, vol. 33, pp. 45-52) 直接的には，英語教育であったが，外国語教育をいかにすべきかの視点から発言したつもりであった。今回「外国語教育」と題していても，その例の多くは英語に偏っているのだが，それは実例を身近な英語から引きながら（必ずしも他の外国語の場合に当てはまるわけではないが，そしてその結果はやはり「英語教育」とすべきだったということになるかもしれないが），外国語教育を論じようとの意図である。前回は外国語教育の方法について述べた。今回は外国語教育において言葉を扱うことの意味を考察する。多少重複するところがあるが，その扱い方には視点の違いがあるはずである。

純に認めていいものであろうか。場合によっては，マイナスとして働くこともあるのではないだろうか。特に，機械的な訳読になっているような場合には。

外国語教育の目的は，その外国語を習い，その外国語を通して，多くのことを学ばせること，それとともに，母国語を再認識することとが考えられるが，このどちらも，言葉に対する感覚を育てることが前提になっていなくてはならないだろう。現実には，言葉に対して無感覚にさせるような，外国語教育になっているのではないか，点検してみる必要がある。

外国語教育において扱う言葉は自然科学で用いようとする言葉に終始する訳ではない。できるだけ語を厳密な意味において用いようとする，辞書的な，いわゆる "denotation" に徹した言葉ではなくて，語の広がり "connotation" を十分に生かした言葉をも扱うのでなくてはならない。なぜなら，外国語教育はその外国語がどのようなものかを，総体的に把握させるものでなくてはならないからである。言葉は多面的な在り方をしている。それゆえ，その多面性を理解させるものでなくてはならないはずである。

外国語は主に知的な捉え方がなされてきたように思われる。その典型的なものが文法中心の外国語教育ということになるのだろう。日常のレヴェルでは話されたり，聞いたりできないゆえに，その在り方はむしろ当然かもしれないが，言葉は日常的には感覚によって捉えるべきものであるとすれば，外国語においても知的な把握の段階に留まらず，感覚的な把握をもめざす必要があるのではなかろうか。これまで外国語教育の中で言葉は「きっちりと枠をはめられたもの，閉じられたもの」として教えられてきたように思われる。昔，例えば，"life" は「生命，人生，生活，一生」の4つの意味が基本だとして，ひたすら繰り返して，これを覚えることを勧めていたラジオの英語講座の講師がいたが，思えば，今までの外国語教育はこれに類したことをしてきたのではないだろうか。言葉は限定されたもの，明確に規定されたもので，それ以上の広がりがないかのような教え方をしてきたのではないだろうか。

外国語習得の初期段階では，能率を考え，語彙を限定し，文法の基本を教えていくのであるが，この段階がいつまでも続き，結局言葉は閉じられたものという意識を植え付けてしまってはいないだろうか。文学を専攻する学生を考えてみた時，長い語学訓練の時期を経た後で，本格的に文学作品を読むことになるが，語学訓練の時と作品を読む時とでは，言葉の扱い方に違いがあって，戸惑うのではなかろうか。

言葉を「閉じたもの」から「開かれたもの」へ解放しなくてはならない。そのためには，始めからこのような観点で外国語教育を考えていく必要がある。これが筆者の言う外国語教育の中の文学教育の意味である。

II

毎年初めて受け持つクラスに次のような文の意味が分かるかどうか聞いてみている。

Drink up, gentlemen. （皆さん，飲み干して下さい。）

He *came over*. （彼ははるばるやって来た。）

She *brought in* the laundry. （彼女は洗濯物を取り込んだ。）

いわゆる熟語動詞（Phrasal verbs）であるが，初めてこれに接する学生は答えられないようである。ほとんどの学生は，特殊な意味ではないかと思い，すぐ辞書を引く。辞書に載っていれば，安心する。載っていなければ，より詳しい辞書を見なければと思う。明らかに学生達は，間違った意識を持っている。実際には，辞書に載らない熟語動詞の方が遙かに多いのであって，動詞と不変化詞の基本的な意味を抑えておけば，ほとんどが簡単に理解できることを理解していない。できるだけ常識的に解釈してみて，それで分からなければ，辞書を引くべきなのに，順序が逆になっている。熟語動詞が使われる頻度はかなり高いのに，なぜこれが今まで軽く扱われてきたのであろうか。次のような批判をしている人もいる。「従来，文法学者はこの問題を特別には取り上げなかった。彼らいわく，動詞と前置詞を適当に解釈すればよい，と。」[3] このような考え方にも問題はあるかもしれないが，恐らくは，文法主体の英語教育では，熟語動詞などは，それ程重要な事項とはなりえないため，熟語動詞[4] を詳しく教えることがないためであろう。

しかし，熟語動詞の例を最初に持ち出したのは，英語教育の中で熟語動詞が不当に軽く扱われていると言うためではない。もちろん，熟語動詞（と言うよりも，これを構成している基本的な不変化詞）が英語の微妙な表現を作り出しているので，この種の用法に是非慣れる必要があることは，強調されていいのだが，それ以上に，この問題は外国語教育全般に関わる問題を示しているように思われるからである。それは言葉が広がりを持っているものとして扱われていないことである。熟語動詞の不変化詞が文の中で前置詞か副詞かということはたいした問題ではない。その不変化詞が基本的な意味を持っていろいろな状況に使われていることを理解させるようなあり方がされていないことである。例えば，"bring out" が「持ち出す」，「明らかにする」，「発行する」等，たくさんの意味があるが，このような意味を一つ一つ覚えさせるような指導をしてきたのではないか。"bring" と "out" の基本的意味を把握し，その意味の延長上に捉えれば，多くは理解できる。また，一見全く関連を見付けることができそうにもないものでも，何らかの内的な関連を感

3） Tom McArthur 著　宮内秀雄R. C. ゴリス訳編「コリンズ英語熟語動詞活用教本」（秀文インターナショナル，1977），P. ii 熟語動詞を詳しく説明する辞書がここ最近相ついで出され，以前とは大分状況が変ってきている。

4） ドイツ語の分離動詞の教え方にも同様の問題がありそうである。

じとることができるはずである。そこに，その言葉を使う人の考え方，感じ方を見ることができる。*Pygmalion* の中で "do in" という語を巡って面白いやりとりがある。

LIZA〔piling up the indictment〕 What call would a woman with that strength in her have to die of influenza? What become of her new straw hat that should have come to me? Somebody pinched it; and what I say is, them as pinched it *done* her *in*. MRS EYNSFORD HILL. What does *doing* her *in* mean?

HIGGINS〔hastily〕 Oh, thats the new small talk. To *do* a person *in* means to kill them.

（イライザ〔調子づいて論告をすすめる〕だから，そんな力のある伯母が，インフルエンザなんかで死んでたまるか。あたしがもらうことになっていた，あの新しい麦わら帽はどうなったんだろう？誰かがきっとクスネたんだ。つまり，あたしがいいたいのは，それをクスネたやつが，伯母をやっちまたんだ。

エインスフォードヒル夫人　やっちまうって，なんのことですの？

ヒギンズ（あわてて）なあに，これは新式の世間話でね，やっちまうっていうのは，殺してしまうことなんです。)[5]

"do in" が「殺す」の意味であることは，日本語でも「やる」が同じ使われ方をするように，すぐに分かる言葉である。"go out with" が「一緒に外出する」の意味から「交際する」という意味をも持つに至る経過は容易に分かる。もちろん，動詞や不変化詞の意味をいくら重ね合せても熟語の特殊な意味が浮んでくる場合だけではない。しかし大事なことは，いつでも基本的な意味を理解して，その広がりとして捉えていくことであって，始めから，熟語動詞を単独に覚えることであってはならないであろう。

III

前節で述べたことは，もちろん，熟語動詞に限られるわけではない。いわゆる熟語 "idiom" においてもそうである。同じ「～のために」でも "*because* of," "by *reason* of," "by *virtue* of," "on *account* of," "for the *sake* of," "thanks to" その他があるが，イタリックの部分の語の意味を基本にしていることが分る。学生の多くは，"virtue" と "by virtue of" がまるで別のものであるかのように考えているのではないだろうか。

比喩的表現の場合でも同じことが言える。例えば，"The party went like a house on

---

5) Bernard Shaw, "PYGMALION" (Penguin, 1983), p.77 訳は「バーナード・ショー名作集」倉橋健作『ピグマリオン』による。

fire."[6] というような文を訳させてみると，学生は辞書を引いて，「会合はとても素晴らしかった」というような訳をする。しかし，なぜ，"go like a house on fire" が "go very well" の意味になるのか，辞書にそのように出ているから，という理由以上に，意味を探ってみようとはしない。"a house on fire" が「盛んに燃えている家」であることが理解されていない。もちろん，比喩的表現同じは，それが生れた時の意味は余り意識されない「死んだ比喩」も多いけれども，外国語としてはこれを「生きている比喩」として学ぶ必要がある。学習の効率から見ても，"house" も "on fire" も問題にせず，"like a house on fire" が「ものすごく」とか「盛んに」という覚え方は，記憶力に余計な負担をかけることになる。それ以上に問題なのは，「燃えている家」を生き生きとしたイメージで捉えることが，言葉を生きたものとして扱うことになる，という認識になっていないことである。

「猫に小判」も "cast pearls before swine" も同じ意味のことだとして，片付けてはいないだろうか。後者が，豚が持つ汚いイメージと真珠の高貴なイメージが対比させられていることに気付かなくてはならない。[7] 日本の諺よりも聖書から生れた「豚に真珠を投げる」という諺の方が，表現としては鮮明なものであることがわかる。外国語学習の始めから，そのような言葉の豊かな表現に絶えず注目させるものでなくてはならない。

IV

これまでに挙げてきた例は，辞書[8] の使い方と密接なつながりがある。外国語の学習において，辞書の果たす役割は非常に大きなものがあるが，辞書の活用法に関してただひたすら「辞書を引く」ことしか勧めてこなかったとすれば，問題がある。学生は単語が明確に分けられる複数の意味を持っていると思い込んではいないだろうか。すべて語は生まれた時にはただ一つの意味しかなかったはずである。これが，使用範囲を広げたり，比喩的に用いられたりして，語の意味が広げられてきた結果が，辞書に複数の意味が並ぶことなったのがほとんどであろう。つまり，中心的な意味があり，その周囲に様々な意味を持つ可能性を持つものとして捉えるべきであろう。[9] このような捉え方が辞書の上では複数の意味がある語も，自然にその意味の多くを覚えることができる。例えば，"charge" は，「アプローチ英和辞典」には基本的意味として，「ある容器の中にものをつめる」と「義

---

6) 用例と説明は *Longman Dictionary of English Idioms* (Longman Group Limited, 1979) による。
7) この諺の比較の例は，岩波新書「記号論への招待」p. 217による。
8) 辞書に関しては「英語教育試論」と多少重複する。前回は「できるだけ辞書を引かないで済ますこと」の指導が必要なことを述べた。
9) 研究社から「アプローチ英和辞典」が出されたが，「基本的意味」の項目を作った編集方針は注目すべき行き方と言える。

務や責任，罪などを負わせる」と二つの意味が載せられているが（後者は前者と「なにかをつめる」のイメージで，明らかに関連があることが分かるので，実際は一つの意味と言っていい），これが分れば，この語の多くの意味を理解できる。

初めて接する単語は，外来語として入ってきている語以外は，ほとんど我々の感覚には何も訴えない，馴染みのないものである。その語を覚えるということは，できるだけ，我々の感覚の中に取り込むということでなければならない。単に外国語と母国語を辞書にあるような形でイコールにするだけならば，その外国語に表面的に触れているにすぎない。言葉は感覚的な要素を多分に持っているのだから，少しでも感覚的に分かる行き方をしなくてはならない。例えば，アルファベットを初めて習う時，“w”が“double u”「二重のu」，“y”が“i greque”「ギリシャ語のi」，ギリシャ語の“ω”が“o mega”「大きな*o*」で，“*o*”の“o micron”「小さな*o*」と対比されていること，“ε”と“*υ*”が共に“psilon”が付いていて，「単純な」の意味であること，このようなことが分かるだけでも，覚えにくそうに見えた語が，親しみを増してくるのではなかろうか。植物や動物の名前が出てきた時，それが単に「植物や動物の名前」であることを知っただけで，満足してはいないだろうか。文学作品の中で重要な役割を担っている場合でも，その植物や動物がいきいきとしたイメージで捉えられていることは余りないのではないだろうか。

「単語帳」に載せられているような固定化された意味で語を捉えることは，その語が様々な文脈で使われている事態に対応できない。語は必ずしも明確な使われ方をしている訳ではなく，場合によっては，意識的にせよ，無意識的にせよ，曖昧に使われる場合もある。特に，文学作品においては，その曖昧性に積極的な意味を持つ。それゆえ，様々な文脈に対応できるように，外国語教育の中でも考えていくべきである。

「単語帳」はいかにして単語を覚えさせるか，の短的な答であろう。語彙を限定し，意味を固定化し，集中的に覚え込ませる。このような行き方はますます語を機械的な記号にして言葉は生きたものという意識から遠いものにしてしまうだろう。とはいえ，語彙の効果的な増加法を絶えず考えなければならないことも確かである。

V

語源によって語彙を増やす法があり，万能ではないが，極めて有効である。しかし，これも単語帳的な発想では，問題がある。なぜなら，新しい単語の意味の他に，語源の意味を覚えることになり，記憶の負担がそれだけ大きくなりかねないからである。現実に，有効であることが分かっていながら，語源によって学ぶことが行き渡っていないのは，やはり言葉が生きているものとして扱わないところに原因があるのではなかろうか。語源から語がどのようにして生まれてきたのか，人間はどのような発想で，新しい語を作るのかを

知ることができる。渡部昇一は言う。「言葉というものは不思議なものである。語源的意味をたどると，何の考古学的調査をせずとも，数百年，数千年前の外国人の頭の中のイメージを捕えることができるだから。」[10]確かに言葉の不思議さを知ることが，外国語学習の目的でもある。"nubile" が「〔女性で〕結婚適齢期の，年頃の」，"nubilous" が「雲のような，あいまいな」と「語形が酷似しながら，まったく意味のちがった単語」[11]が，やはり関連があることを知らされるのは，感動的なことでもある。"difficult" の "dif" が否定を表わし，語幹が「作る」から転じた「容易な」の意味であること，"eccentricity" の "ec" は「外へ」で，語幹は「中心」であることが分かれば，なぜ「奇矯な」なのか，語の意味は良く理解できる。しかも，綴り字も必然性を持って組み立てられていることが分かり，比較的簡単に覚えられる。次のような英文の中の "dislocation" の意味は語源が分かっていれば，遙かに的確に分かる。

> Of course all this was the more trivial aspect of a spiritual *dislocation* that began to manifest itself in far more disturbing ways. （勿論以上のようなことは，いずれも平衡を失した精神状態の現われとしては，比較的軽微な部類に属するのであって，遙かに厄介な現われ方をしだしたものが，他にあった。）[12]

"dislocation" は語源的な意味は「場所を移すこと」であり，辞書にある「混乱などという訳語は，「本来あるべき所にないこと」の意から生じている。

語源に関して，加島祥造は次のような提言をしている。「私は時おり，中学三年か高校一年になったら，英語の授業に語源的説明を行なうべきだ，それも相当に徹底して行なうべきだと言ったりします。しかし耳を傾ける人はいないようです。」[13]語源に触れることがあまりなされないのは，「ギリシャ語やラテン語を知らないと，英語の語源もわからないのだと一般には思われがち」なためであろうか。「別にギリシャ・ラテン語の深い知識などなくとも大丈夫」であるが，少なくともギリシャ・ラテン語系統の語は日本人が漢語に持つのと同じような語感を抱いていることが，感覚的に分からなくてはならないだろう。[14]

10） 渡辺昇一「英語の語源」講談社現代新書 p. 17

11） この例は前掲書「英語の語源」から引用した。「、、、ラテン語の『蔽う』という動詞から出たものである。雲は空を蔽い，花嫁はベールで蔽われる。『蔽う』というイメージにおいて「花嫁」と「雲」が結びつく。」 さらに nuance もこれに加わることが分かれば，人のイメージの働きかたの面白さが感じられるだろう。

12） Tennessee Williams, *A Streetcar Named Desire*, "A Streetcar Named Success" （金星堂），p. iii 訳は田島博・山下修訳「欲望という名の電車」（新潮文庫）による。

13） 加島祥造「英語の辞書の話」（講談社）117頁

14） これに関しては，渡部昇一「日本語のこころ」講談社現代新書，特に，第4章『外来語の入り方—英・独・仏との比較において』が参考になる。また，ある旅行用日本語学習書には次のような説明がある。"The Japanese have adopted a great number of Chinese words and characters. These often have a polite, scientific or cultural bearing, in the same way as words of French (Latin) origin in English have a more lofty meaning than those of Anglo-Saxon

語源を知ることは，語彙を増やすことになる。しかし，もっと大切なことは，語の構成要素の一つ一つが意味をもち，それだけ身近な存在として浮び上ってくることである。覚えにくそうに見えた語が，極めて自然に覚えられ，忘れられないものとすることができる。

VI

学生が詩を読み初めて，韻律の説明を受けた時，韻律は余りに機械的なものであり，内的な必然性をもっているものではなくて，外的な飾り物にすぎないものとの印象を抱くのではないだろうか。それは，言葉が良くも悪くもほとんど意味だけを問題にされてきたからである。その言葉が持つ音は発音が分る程度にしか扱われなかった。言葉がどういう響きなのか，問題にされたことはない。しかし，いざ文学作品，特に，詩や詩的散文を読むとき，言葉の響きを全く無視しては，読む意味は半減するだろう。そういう意味で音声教育は大切である。（いわゆる「実用英語」における音声重視は，言葉の持つ音の重要性を教えることにつながるだろうか。）詩（あるいは文学作品）を読むということは，詩を解釈することで終るものではない。詩を全体的に感じることである。そのためには，できるだけそのまま受け入れる必要がある。それが，文の暗唱の必要な理由である。暗唱によって，感覚的な把握に一歩でも近づくことが可能となる。

語とその音との結びつきには，ある程度の必然性があるだろう。多くの擬態語 "onomatopoeia" の存在はその典型的な例である。また，音のある種のものには特別な感じやイメージを持つことがあるのも確かであろう。例えば，"fl" や "gl" で始まる語には「光」や「炎」に係る語が多い。このようなところは，我々の実感できないものだろうか。もし

---

origin."（日本人はたくさんの漢語や漢字を採り入れてきた。英語においてフランス（ラテン）起源の語がアングロサクソン起源の語より高尚な意味を持っているのと同様に，これらの語はしばしば上品な，科学的な，あるいは文化的な意味あいを持つ。）
Japanese for Travellers (Berlitz, 1974), p. 15

語源による学習法をより効果的にするためには，一歩進んでギリシャ語やラテン語の感じを摑む程度の概論をしてみたらどうだろうか。（外国語学習は多くの時間が必要であるが，もっと気軽に外国語に触れてみることがあってもいいのではなかろうか。）「感じ」とか「語感」というのは余りに曖昧な概念のように思われるが，「音や形からその言語らしく感じること」の意味である。言葉を生きたものにするには，できるだけ語感を深めることが必要である。ギリシャ語やラテン語の感じをつかむことは，極めて大切なことではなかろうか。なぜなら，ギリシャ語やラテン語は英語の語彙のうえで，日本語における漢語の占める位署に等しい重要性があり，しかも，ギリシャ語とラテン語では語感はかなり違うものだからである。少なくとも，ギリシャ文字がどうのようなラテン文字に置換えられるのか位は早いうちから知っておく必要がある。そうすれば，rh，ph，ps，pn，などの綴りが存在する理由が良く分かる。

普通の英語国民がギリシャ語やラテン語の感じをつかんでいる訳では必ずしもないだろう。だが，外国語を学ぶものが，語源を探ることが外国語学習に有効な手段として，分かった時，ギリシャ語ラテン語の区別なく，あるいはあったにせよ，語感の違いを認識することなく，語源的意味のみを追及することは生きた言葉を扱うことに関してはもの足りない気がする。"sympathy" も "compassion" も語源的には全く同じ意味であるが，これが同義語辞典の説明の違いの他にも，語感の違いもあるような気がする。

それが全く不可能なものならば，詩においての音的な要素を我々はほとんど問題にできないことになる。例えば，頭韻や多用された音の意味を問えなくなるだろう。

言葉が閉じたものではなく，開かれたもの，広がりを持つものであるならば，外国語教育においても，そのような認識を持つ在り方が求められなければならない。外国語教育の中で読む能力を養うことが主に求められているとすれば，読む対象としては，散文に限られるわけではなく，散文も含まれてくるだろう。言葉の豊かさを知るためには，必然的に文学作品に比重が掛かってくるであろう。

言葉を扱う時には，様々な問題が生じてくる。単語の意味や発音の場合も（訳語を何にするかの場合も）あれば，文法の場合もある。背景が問題になる場合もある。多面に渡る問題に対処できる外国語教育でなくてはならないが，根本的には，その語なり，表現なりの必然性が分かることである。その必然性を理解することが，文学のアプローチと同じなのである。

外国語を知るためには，多くを読む必要があるが，決して速読を目指すべきではない。言葉の広がりを理解すること，深く読むことを通して少しずつ，早く読むことのできる段階に達することを待つべきである。単に内容を知るだけの読み方は，言葉を生きたものとして扱うことにはならない。

最近詩が読まれなくなってきているとすれば，それは詩を取り巻く状況が厳しくなってきているためであろうが，言葉が機械的に扱われてきたことにも原因があるような気がする。シェークスピアを読むより，実用英語を行なうべきだとの意見を時折耳にするが，実用英語によって，言葉の深さを知ることは可能だろうか。シェークスピアが言葉を豊かに使った詩人[15]だとすれば，それだけで取り上げるべき十分な必然性がある。書いた者の個性を感じるような読み方ができること，それが外国語教育を通しての文学教育の目指すところではないだろうか。

15） 例えば，W.エンプソン "〔Shakespeare's〕 use of languge is of unparallelled richness"（〔シェークスピアの〕言葉の用い方は比類なく豊かである）と言っている。